Niigata University



### 3　内痔核に対するICG併用半導体レーザー治療の経験

島村　公年・島村　栄員
しまむらクリニック

インドシアニングリーン（ICG）を内痔核に注入し，低出力の半導体レーザーで凝固する新しい非観血的治療法を16例に施行した．ICGは半導体レーザー光の吸収を増強し，かつ深部への進行を遮断する．対象は脱出または出血が主訴の2度ないし3度の内痔核で，手術は原則として腰椎麻酔で行った．照射部位は2.8カ所（以下平均），手術時間18.8分，入院期間3.1日，術後経過期間は11.6ヶ月であった．術後の疼痛は軽度で多くは自制内であった．出血は少量で無処置あるいはビスマス系座薬で止血した．脱出は半数例が術直後に，残りは1～2ヶ月かけ徐々に消失し，1例のみ残存した．再脱出はなかった．本治療に対し，11例が満足，4例がまあまあ満足，1例が不満と評価した．

### 4　ICG併用半導体レーザー療法を用いた痔核のday surgery

杉本不二雄
杉本医院（消化器科，外科，内科，肛門科）

ICG併用半導体レーザー療法は805nmの単一波長半導体レーザーと805nmが最大吸収波長であるICGを併用し，内痔核を切除せず縮小させる方法である．2002年4月から2003年11月の1年8ヶ月間に，64例の痔核手術をday sergeryで行い，内62例に半導体レーザーを使用した．

内訳は，レーザー単独が20例，レーザーと結紮切除術（LE）が25例，レーザーと痔核，裂肛手術が14例であった．レーザー単独例ではLEとの併用例に比して，術後疼痛，職場復帰，創治癒期間において優れていた．レーザー療法の合併症は，後出血が1例，外痔核の遷延性浮腫が1例であった．

本療法は，痔核の程度に応じてレーザー単独または，LEとレーザーの併用で使用することで，LEの数を減らし，術後疼痛の軽減，出血リスク低下を期待できる点で有用である．

### 5　当科における痔核・脱肛に対するPPH症例について

酒井　靖夫・番場　竹生・本間　英之
武者　信行・坪野　俊広・相場　哲朗
川口　正樹
済生会新潟第二病院外科

当科ではPPHを2000年8月から導入し，20例に行った．男：女＝15：5，年齢27～79歳である．内訳は内痔核・脱肛18，ホワイトヘッド肛門1，不完全直腸脱1で，Golig her分類ではⅡ度1，Ⅲ度6，Ⅳ度13例であった．13例に外痔核やスキンタグ，肛門ポリープなどの併存病変を認めた．術式はPPH単独13，PPH＋付加手術7で，併存病変にL&Eポリープなどを必要に応じて付加し，痔動脈結紮を9例に行った．術後合併症は後出血1，有痛性外痔核2，晩期部分粘膜脱再発1，麻痺性イレウス1であった．術入院期間は平均7.6日で，PPHのみでは多くは5日以内に退院できたが，付加手術すると通常手術と同様であった．再発は1例（5％）でL&Eし，縫合部狭窄例はなく，全例脱肛は消失し，痔核の縮小が得られた．

【まとめ】PPHは痔核の発生機序に則った合理的な術式であり，術後疼痛は従来法より軽微であり，入院期間も短くでき，患者の満足度は高い．

### 6　当科におけるPPHの現況

岩谷　昭・松尾　仁之・小林　孝
新潟臨港総合病院外科

PPHと結紮切除（LE）とを比較検討した．2001年1月より2003年10月の間で，Ⅲ度以上の痔核手術症例266例を対象とした．PPH 154例，LE 112例，手術時間は平均でPPH 27分，LE 39分と有意にPPHが短かった．鎮痛薬投与期間は有意にPPHが短かった．入院日数は平均でPPH 5日，LE 12日と有意にPPHが短かった．退院後疼痛を訴えたものはPPH 7％，LE 18％で有意にPPHが少なかった．術後出血，狭窄に有意差はな

NII-Electronic Library Service